

スクリーンツーリズム促進プロジェクト
第一回ワーキング議事メモ

日 時：平成 22 年 7 月 27 日（火）14 時～16 時

場 所：合同庁舎 2 号館 16 階大臣官房運輸安全監理官会議室

出席者（敬称略）：

<委 員>山村委員（座長）、永井委員、菅沼委員、渡邊委員、四宮委員、

<省 庁>松山（経産省）、林（文化庁）、吉田（総務省）、瓦林・河田（観光庁）

<事務局>西村・梶浦・徳武（ユニジャパン）、室伏（JFC）

1. 挨拶

2. 委員紹介

議 事（敬称略）

1) 本プログラムの実施計画について

（委員）

- ・国民の税金を使うプロジェクトであるので、国民にもわかりやすいものにする必要ある。スクリーンツーリズムを通して何を実現したいのか、交流を促進する等、国民にわかりやすい形で具体的に示したほうが賛同を得ることができると思う。
- ・アニメ作品の例ではあるが、製作者・地域・ファンが一緒になって作品を育てていく雰囲気があるほうが、息の長い観光地に育っている。一緒にコンテンツを育てるだという観点があってもいいのではないか？
- ・地域にとって、いかにメリットがあるのかを説明することも重要である。
- ・如何に作品のファンから地域のファンに転化していくのかという点についても重点的に議論していく必要があると思う。

（委員）

- ・（製作者の立場から）企画の段階から観光客がくるという想定で作品を作ったことはない。結果的に集客する作品ができたということはあるが、計画の段階から観光客誘致を考えて結果を約束して作品を作ることは困難であろう。
- ・八甲田山の映画も観光客の誘致に貢献しているようであるが、最初から八甲田が認知されていたわけではなく、作品を通して認知されてきたものである。
- ・現状では、制作者は、地域とそれほど連携していないし、作品ができた後に地域に対してフォローしていこうとも考えていない制作者が多いのではないか。制作者を含めて観光客誘致を考えていくというのは、課題が多いと考える。

（委員）

- ・アイリスは、観光客を誘客するために作品を呼んだわけではない。ソウルとの定期便が運休になる話があったため、ソウルに現地調査に行ったが、秋田については、ほとんどの人

が場所も知らないという状況であった。秋田の認知度を上げなければならないと考えていた際、アイリスの話があり、撮影に協力することになったのである。

- ・アイリスの撮影には、ボランティアや寄付を募るなど、手作り感いっぱいの支援を行った。それがスタッフや俳優に評判がよく、多方面で秋田の話をしてくれたので、観光客が増えた。最初から狙ったわけではなく、結果として観光客誘致が実現したものである。
- ・今後も制作会社と観光客に対してもフォローが大切だろうと感じている。

(委員)

- ・「狙った恋の落とし方。」は、日本でプロデュースした時には、日本国内での配給は決まっていなかった作品だ。
- ・北海道では、中国の人が来訪しているのに、地元の方は、なぜ中国の人が来ているのかわかっていなかった。そこで、地元の人に、中国の人が来る理由や、自分が住んでいる土地の良さをわかってほしいと思い、全国に先駆け北海道 11 館で先行上映した。
- ・中国の人の北海道ブームは今も続いている。
- ・中国では日本のスクリーン数以上の 600～700 スクリーンで上映されるので、影響も大きい。
- ・スクリーンツーリズムで対象とする映像については、作品の質が高いことが前提である。興行の成功が期待できる作品か、1 つのコンテンツとして地元で大切に長く使っていく作品なのかの見極めが重要。また観光に活用する場合、映像が直接誘客を図ることができるものか、既存の観光地としての魅力に新たな魅力付加するような着地コンテンツなのかの見極めも重要である。
- ・指針のとりまとめにあたっては、地域の立場、制作の立場、行政の立場などそれぞれの立場の人がそれぞれの役割を理解できるような整理の視点が必要であると思う。

(委員)

- ・地域発でつくる映画も増えているが、上映される機会が少なく、存在することさえ知られていない作品も多数ある。
- ・作品をどう「拡散」していくのかも大切である。「拡散」のためのプラットフォームづくりも必要に思う。
- ・これまでの経験から製作体制内にトラブルを内包している作品は、いい作品にはならない。
- ・製作の体制をどう支援していくのか？ 基本的なことではあるが、口座の管理ができていない、どの映画の資金なのか整理されていないところもある。海外の会社の場合は難しいが、日本の会社の場合、資金管理などバックサイドの支援をどうするのか、権利や契約をどのように扱うのかも検討していく必要があるのではないか？
- ・映像作品については、企画の段階からどう「拡散」していくのかを決めていったほうが良い。劇場公開の前に、ネット配信をすべき作品なのか、劇場公開が先のほうが良いのかなど、企画に段階に、最終の「出口」を見据えたほうが良いと思う。配給の会社やプロモーションの会社が企画から入ったほうが良いと感じる。
- ・劇場公開だけでなく、YouTube やその他 WEB 媒体を利用するのかなど、いままでの常識にとらわれないほう良いのかもしれない。海外に向けた作品は、WEB 環境を積極的に利用したほうが良いのではないか。

(委員)

- ・映画は、制作だけでなく、興行と配給は重要である。この委員会にも、そのような立場の人がいても良かったのではないかな？

(委員)

- ・テレビの視聴率は、1%が約10万人と言われているが、YouTubeで30万人にアクセスがあった、という実績の方が認知度は上がる。活用する映像が、必ずしも映画館で上映される映画である必要はないと思う。
- ・インターネットも無料コンテンツのアクセスが多い。その場合は、資金回収モデルを企画の時からきちんと作っていく必要がある。企画の段階で出口をことまで考えていく必要がある。

(委員)

- ・このプロジェクトを通じて支援する作品は、海外の人が日本に来ようとするきっかけづくりを促進する作品、かつ質の高い作品を狙っている。
- ・一過性の作品を狙っているのではなく、作品の影響が長く働き、観光客の数が増え地域の知名度が上がる作品があれば良いと思っている。
- ・撮影地のプロモーションとどのように連携していくかも大きな課題だと思っている。
- ・作品の質にも関係するが、作品には当たり外れはあるが、ビジネスに関する当たり外れには、直接関与すべきではないと思っている。
- ・自分たちの良さを伝えきれていない現地の人の目線と、海外からの外から目線のミスマッチが多い。それを知るきっかけにもなるだろう。
- ・役所の場合、単年度予算なので、制作から公開まですべてに携われるものではない。
- ・観光客の誘致だけでなく、制作の環境づくりでも、海外から日本にきてもらうきっかけづくりになればいい。

(委員)

- ・コンテンツによる経済活性化の視点が重要ではないか、極論すると興行的に失敗したとしても、それによりどこかの土地に人が訪れるようになって、お金を落とすようになれば、スクリーンツーリズムとしては成功と言えるのではないかな。
- ・映画、TV、インターネットと様々な流通経路があるが、互いの連携をどうしていけばいいのか考えていく必要がある。

(委員)

- ・JFC やコミュニティシネマセンターなど、それぞれの活動は活発化し、育ってきたが、この先の発展には横のつながりが必要ではないかと考えている。今回の連携が新しいことに積極的に取り組んでいくシステムを作っていければ良いと考えている。

(委員)

- ・地域振興と映像、地域資源と制作会社とをつないで、映像で発信していこうという、地域発クールジャパンをやってきた。
- ・地域と映像、ファンの3つをどうつないでいくかはやはり課題だった。出口の戦略がないまま作品づくりを行ったので、作るまではうまくいったが、その後の一般の人に届ける戦略がなかった。

- ・ 出口戦略を考えることは、メディア戦略の中で大切なことである。

(委員)

- ・ アイリスⅡでは、出口まで組み立ててやっていきたいと思った。

(委員)

- ・ 省庁が連携していかなければならない事業であると思った。
- ・ 北海道の方は北海道そのものをPRしているが、中国の方はそれよりも北海道で何ができるかを知りたいというニーズがある。このように、北海道の人と中国の人の間には、「北海道」に観光の上で求める意識の違いがある。
- ・ その他、取材の依頼がきたときに、FCでは取材を受けにくい状況もある。
- ・ 中国からのツアー客にたいして、旅行コンテンツを立ててあげる体制も必要。

(委員)

- ・ 本日の討議でスクリーンツーリズムの定義に関する議論の方向性がある程度見えてきたように感じる。入口から出口までのプロセス、チェックポイント、それに対してどのような省庁等のサポートがあるのかを考えていくことで、新しいスクリーンツーリズムの定義が出てくるのかもしれない。
- ・ 最終的には、質の高い作品、質の高いツーリズムが必用である。

2) 支援作品の募集・選定について

①参考資料2について

(質疑)

- ・ 「日本以外の地域での上映・放送が決定していること」の条件は、難しいのではないかと決定とはどこまでが決定ということなのか？

(事務局)

- ・ 全く公開・放映されないというのでは困るので、この文言を入れている。
- ・ インターネットだけの公開では、今回の選定には入らない予定。
- ・ 検討の結果、「プロジェクトごとに検討の余地あり」などの文言を加える、または表現を変えることで対応することとなった。

(質疑)

- ・ 「公序良俗に反すること」とはどういうことか？

(事務局)

- ・ なるべく広く募集をかけたいので、明らかにそのような作品はだめだという程度である。

(質疑)

- ・ 映像作品（映画・ドラマ）とあるが、ドキュメンタリーやアニメーション等などはどうなるのか？

(事務局)

- ・ 想定としては、映画・ドラマを考えているが、とくにジャンルは問わない。日本をいかに

表現してくれるかという作品の中身の問題である。

※参考資料2の訂正内容

- ・映画・ドラマ」になっている部分には、「映画・ドラマ等」を入れる
- ・1 支援作品の募集目的で「インバウンド観光促進（以下「スクリーンツーリズム」という）の促進」に訂正する。

上記の訂正を前提に、事前告知文は承認

②資料3について

(質疑・意見)

- ・海外のプロジェクトに支援するのではあるが、どこに支払うのが問題。日本で払うものなので、事務局が直接払うのか？日本人のラインプロデューサーに払うのか？
- ・制作側は、なるべく早くもらいたい、支援する側は、なるべく遅く払いたいという矛盾がある。今後の課題であろう。

(事務局)

- ・仮に未払いの問題が発生した場合、申請者＝責任者になるので誰を申請者にすべきか検討してほしい。
- ・作品を日本国政府が支援したとなった場合に問題にならないようにしたい。
- ・審査のときは、日本側のラインプロデューサーからの説明は必要であると考えている。

(質疑)

- ・海外で公開する条件があれば、日本の制作会社でもいいのか？海外の制作会社でなければいいのか？役者だけ外国人でもいいのか？

(事務局)

- ・プランを示してもらって、選定していきたい。
- ・海外の制作会社だと判断がしづらいので、日本のラインプロデューサーをつけるのはその意味もある。

3. 次回の予定

8/16（月）14：00～16：00の開催に決定した。